

織豊系城郭の構造

——虎口プランによる縄張編年の試み——

千 田 嘉 博

はじめに

最近の中世城館研究の進展はめざましい。それは主として考古学者による発掘調査からの研究と、在野の城郭研究者による縄張調査^①からの研究によって支えられている。殊に後者、地表面観察による縄張調査は、全国的に水準の高まりが著しい。これは、

①城郭研究者の活発な活動に加え、②発掘調査による遺構確認の増加、③各県単位の城跡悉皆調査の進行、『日本城郭大系』^④の刊行に代表される基礎資料の充実、④考古学者、城郭研究者共同の研究発表の場である「全国城郭研究者セミナー」^⑤の実現によって、視野の広い多様な研究が可能になったからである。

従来、地表面観察による城郭の縄張調査は城郭史の視点からなされてきた。しかし、村田修三氏の「中世城郭遺跡を地域史と在

地構造分析の史料として活用する」という提唱以来、史料化の基礎研究として進められている。また、発掘調査、考古学からの研究もこの方向を押し進めている。^⑦

およそどのような城郭の体系（城郭の縄張、立地、配置、城下町等）を持ち得たかは、それを創出していった権力の特質を直接に示すものである。特に城郭の縄張にはそれが反映される。だから城館址自体を解明することで、権力やこれを規定した社会を究明することが可能である。しかし、現状では発掘資料や現地踏査資料（縄張図）を合わせて活用する方法が確立しておらず、一足飛びにこれらを論ずることができない。

城館研究を歴史研究の一アプローチにしていくなために、活用 of 基礎になる考古学的な縄張分析方法を示し、それを通じて縄張（遺構）編年を確立する必要がある。しかし今のところ、遺構の

厳密な分析によって縄張編年を組み、そこから城郭の変遷を説いた研究は皆無に等しい。

本稿はこのような当面する状況を踏まえ、考察の基礎となる中世城郭史を概括し、遺構を確認しやすいた織田氏、豊臣氏、徳川氏系の城郭遺構の分析を行い、縄張編年を試みる。そして城郭の縄張発達を理論的に把握することによって、織豊政権研究や織豊期社会研究への方向を示そうとするものである。以下の本論では、織田氏、豊臣氏、徳川氏の城郭を大きく織豊系城郭と一括して考察を進める。その場合、幕藩体制以前の徳川氏を文献史上どう位置づけるかは問題になるが、城郭研究からのアプローチが可能だと思われる。

城郭は様々な地形に立地した。しかし詳細な遺構検討が広く可能なのは山城に限られる。そのため本稿は織豊系の山城を中心に検討を進める。

① 城郭の各出輪の機能を読みとり、その評価を縄張図にまとめる調査である。高水準の縄張図は城郭の機能を把握するのにきわめて有効で、正確な測量図と補い合う関係にある。今後一層精度を高め、客観的な表現をめざすことが望まれる。

② 村田修三編『図説中世城郭事典』（新人物往来社、一九八七年）は現時点での縄張調査の集大成である。

③ 三重県、熊本県、静岡県、岩手県等で報告書が刊行されているが精粗の差が激しい。その中で、シンポジウムを開きながら地域ごとの

調査を進めている滋賀県が目される。滋賀県教育委員会・滋賀総合研究所『滋賀県中世城郭分布調査』一～四、一九八三～六年、刊行中。

④ 坪井清足他監修、新人物往来社刊、一九七九～八一年。

⑤ 中世城郭研究会主宰。一九八四年に第一回（東京）を開催。八六年（神戸）で三回目を数えた。

⑥ 村田修三「城跡調査と戦国史研究」『日本史研究』二二一、一九八〇年。

⑦ 代表的なものに萩原三雄「丸馬出の研究」〔『甲府盆地——その歴史と地域性』、雄山閣、一九八四年〕、中井均「山崎城の構造——天正十年秀吉築城の構造と城郭史的意義——」〔中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』、同朋舎、一九八六年〕、柴田龍司「戦国時代末期の城郭から見た権力構造」〔千葉県文化財センター研究紀要10』、一九八六年〕等がある。

⑧ 織田氏と同盟関係にあった徳川氏の城郭を一括して考えることは不適當なことではないと考える。

⑨ 山城とかかわりながら平城にも独自の発展があったと考えられる。しかし城郭の縄張変化から、権力の特徴を追求するには山城の検討はるかに有効であろう。

一 縄張発達史の再検討

まず、中世城郭発達史を概括し、その問題点を整理する。中世城郭は曲輪^①、堀、土塁、石垣で普請部分が構成された。これらの配置が縄張に当たり、その良し悪しが城郭の評価になる。また城郭の年代を示す。縄張の発達史を掴むには、城の防禦された出入

口である虎口トラグチと堀・石垣の発達を捉えることが不可欠である。そこでこの二点を中心に検討する。

1 虎口の発達

縄張の中で最も激しく変化し、著しく発達したのが虎口である。勿論、中世を通じて均一に変化したのではなく、戦国期後半から織豊期にかけて急激に発達した。その背景には当然、戦闘方法の変化が存在し、それは動員力の増大や、兵農分離等の社会の総体的な変化に規定された。

虎口は最も単純な平虎口からはじまる。そして虎口周辺が土塁で固められる。それと前後して、虎口に至る城道をシグザグにして横矢③を効かせたり、堀切④と合わせて土橋を渡って入るようになった。さらに発達すると、虎口前にテラス状の曲輪(虎口受けの曲輪)を造り、直接進入させない縄張も一般化した。これらが複雑に組み合わさって戦国末期から織豊期にかけて枳形キガタと馬出ウマデが出現する。このように虎口が発達したのは防禦と攻撃という両面の機能を虎口が果たしたからである。

枳形は虎口部分の塁線が外に張り出した外枳形と、外側の塁線は直線のまま、内側で塁線が折曲する内枳形に大別できる(図1)。従来、両者の機能差は注目されてこなかった。しかし、外

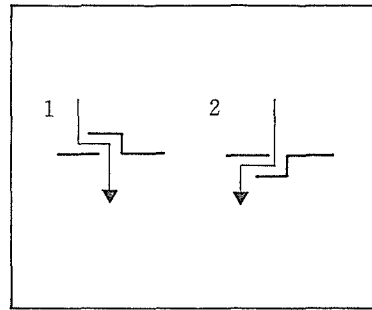


図1 外枳形(1)・内枳形(2)概念図

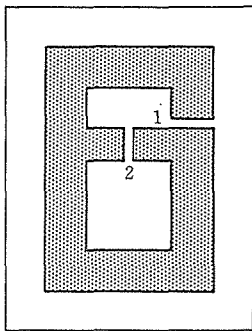


図2 馬出概念図

枳形は虎口塁線が一步外へ踏み出し、曲輪の外へ積極的な出撃が可能な形態であるから攻撃重視の虎口と評価できる。内枳形は閉めきれば他の塁線とひと続きになる形態であるから、防禦を重視した虎口と評価できる。

造られた出撃用の曲輪で、攻撃機能を最も高めた施設の一つである(図2)。攻撃の足がかりとしての馬出を曲輪の外に設け、出撃の虎口(1)を前に、防禦の虎口(2)を後に分離して曲輪の機能分化を行うものである。^⑤

馬出は武田氏、後北条氏の城郭に早くから使用された。武田氏系の名胡ナマコ桃城馬出の発掘成果や後北条氏が築いたと考えら

れる花崎城馬出の発掘成果^⑦、さらに詳細な踏査の成果から、武田、後北条氏の馬出は基本的に塁線に土塁を備えず、内部に建物を持たない小曲輪であったと考えられる。つまり両氏の馬出は本来何もない明け放ししておく空間だったと評価できるのである。^⑧

これに対し織豊系城郭の馬出は必ず塁線に土塁を巡す特徴がある。この事実とは二つの馬出の発生系譜に重要な違いがあることを暗示する。馬出の発生を多元的に検討する必要がある。^⑩

2 堀・石垣の発達

防塁、阻塞類でない、曲輪を主体とした山城が広く築かれ始めるのは南北朝期である。この時期の山城は戦国期とは比較にならない比高差のある深山に築かれることが多い。これは広域の作戦が必要になる南北朝期の政治状況とかわわっているとされる。^⑪

南北朝期の山城は全般に造りが未熟で、曲輪の削平は不十分である。土塁を使用するのは稀で、堀は浅く、狭いものが多い。堀切を要所に入れないので城域にけじめがつかない。諸点が改良されてくるのは南北朝期の後半からだと考えられる。しかしそれでもまだ削平地と堀の連携はよくない。同時期でも丘や平地の城館の堀は山城に先行した規模を持つ。京都府の口尻ヶ谷遺跡では、館と考えられる上幅6m、深さ1・6mの堀が検出されている。^⑫

南北朝の末期から室町時代に入ると、国人領主制の展開によって、城郭は集落に近い比高差の少ない丘や山に築かれることが多くなる。また、館と山城がセットで使われるようになる。この時期では文安元年（一四四四）に築き、文明二年（一四四七）に改修したことが確実な奈良県の西方院山城の二重堀と土橋が知られる。^⑬ 堀の上幅8m、深さ4m程である。

戦国期に入ると急激に堀が発達し、多様化する。単なる堀切でなく、帶曲輪^⑭、武者屯^⑮となり、斜面を下る堅堀となる。そして戦国期の中頃から後半にかけて北海道、沖縄を除くほぼ全国に出現してくるのが畝状空堀群^⑯である。曲輪周辺の緩斜面処理を果たしたものと考えられる。基本的には堀を等高線と直角の方向に並べ築いた山腹の密集空堀群である。

地域によって盛行の時期が違い、北陸・中部・近畿地方では天文から永禄期（一五三二―一五六九）にかけて、中国・四国・九州地方では永禄から天正期（一五五八―一五九一）にかけて、東北方北部では文禄から慶長の初め頃（一五九二―一六〇〇）まで使用されたと考えられる。

畝状空堀群は最初、曲輪とセットで使用されるが、最終的には放置すると危険な緩斜面を連続して切り、相互にある一定の土地を使用不可能にする機能のみが存続したと考えられる。曲輪と直

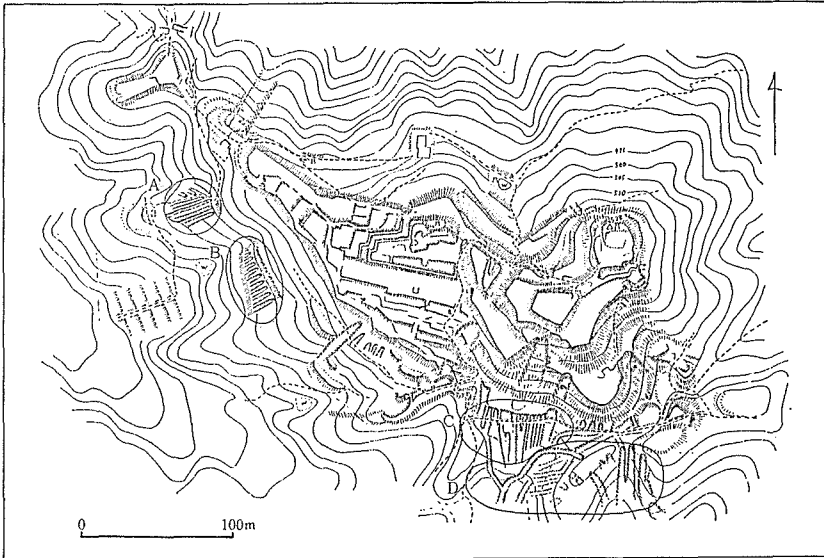


図3 奈良市椿尾上城 (村田修三氏原図に加筆)

天文期に造られた空堀群Cは曲輪に接して使われるが、元亀期に造られた空堀群A・B・C・Dは曲輪とは関係なく、攻城の足掛りとなる部分を予め破壊して使用不可能にしている。

接に噛み合わない空堀群の使用になるのである(図3)。この転換を近畿・中部地方では元亀期に求めることができる。そしてこの変化の原因は、横堀による城造りと深くかかわっていると考えられるのである。

畝状空堀群は基本的に空堀群とその直上の曲輪が一緒に使用され、正面の敵と戦う。だから一つ一つの曲輪を防禦の単位とする城郭に機能をよく發揮するものであった。しかし、近畿での永禄期以降の城造りは側射を狙う横矢掛けと、曲輪群を一体化する横堀の城郭が主流になった。横矢掛けを行う時、堅堀底に敵兵が隠れてしまう空堀群が駆逐されたのは当然である。近畿地方にこの横堀を広く導入したのが織田氏であった。また、統一政権と競い合いながら独自に横堀の城を確立していった後北条氏・武田氏・朝倉氏の領国に空堀群がほとんど分布しないのも同様の理由によると考えられる。一方、横堀による城造りが進まなかった地域では遅くまで空堀群が使用し続けられ、豊臣氏の統一前後まで造られることになったのである。^⑭

横堀は山城で曲輪に沿って郭群を囲い込む堀をいう。^⑮ 蹴しい地形を求めて造られた山城では曲輪の機能分化がはじまる永禄期にならなければ横堀は出現しない。曲輪の前後関係による防禦方法でない、機能分化した曲輪群による繩張を実現するためには横堀

の導入が不可欠だったのである。これで郭群を囲い込んで防禦ラインを確定し、攻撃の曲輪がラインの前へ、防禦の曲輪が後方へと機能の分化が可能になったのである。

曲輪群の機能を明確化し、城郭全体が連携して防禦することを可能にしたものにもう一つ、総石垣がある。これも防禦ラインを形成して総囲みの城郭を造る機能は横堀に等しい。初めて総石垣と曲輪の機能分化を結びつけた安土城の山上郭群には堀が全く使用されていない。このことは両者が同じ機能を果たしていたことを証明する。

- ① 防禦された削平地。
- ② 地表面観察の場合、当然現在見られる遺構は最末期のものとしなければならぬ。
- ③ 敵の側面に向って攻撃することをいう。
- ④ 尾根を切断して稜線伝いの進入を防ぐ堀をいう。中世城郭で最も基本的な堀である。
- ⑤ このことに関しては、村田修三「中世の城郭」(『講座・日本技術の社会史 第六巻 土木』、日本評論社、一九八四年)が詳しい。
- ⑥ 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団『城平遺跡・諏訪遺跡』(一九八四年)による。
- ⑦ 加須市遺跡調査会『花崎遺跡』(一九八二年)による。
- ⑧ 『日本城郭大系』等による。
- ⑨ 後北条氏の場合、天正一八年の滅亡直前には土塁を備えた馬出を築造するようである。

⑩ 後北条氏の馬出は城道として使用した横堀対岸土塁の虎口前をふくらますことから發達した可能性が高い。つまり、馬出に發達する部分が本来、土塁であったから、馬出に土塁が築かれるのが遅れたと考えられる(宮田逸民氏に多くの御教示を得た)。一方、織豊系の馬出は後述するように、くい違い虎口から發達したと考えられる。

- ⑪ 村田修三前掲⑤論文による。
- ⑫ 村田修三「南北朝期山城の特徴について」(『第二回全国城郭研究者セミナー発表資料』、中世城郭研究会、一九八五年)による。
- ⑬ 田辺町教育委員会『南田辺岡地内遺跡試掘調査概報』(一九八二年)。
- ⑭ 村田修三「西方院山城」(『日本城郭大系』一〇巻、新人物往来社、一九八〇年)。
- ⑮ 尾根上の曲輪の一段下にある帯状の曲輪。
- ⑯ 主な曲輪の直下で城道に向って開口する堰状のものを用いる。
- ⑰ 敵型阻塞とも敵状堅堀群とも呼ばれるが、水平な場所所に造られることもあるので、敵状空堀群とするのが最も適していると考えられる。
- ⑱ 横堀を使用した城郭の具体例は第二章で詳述する。
- ⑲ 空堀群が構築された部分に敵兵が進入した場合、空堀底部分を歩いたと推定される。このため、城兵は空堀正面からの迎撃は容易になるが、空堀間の土塁(削り残し土塁)に遮られ、逆に側射はむづかしくなる。これ故、両者は両立しない。
- ⑳ 敵状空堀群の全国的な状況は、『第三回全国城郭研究者セミナー資料』(中世城郭研究会、一九八六年)が最も詳しい。
- ㉑ 平城の場合、城域を画すため曲輪を巡る堀は元来必須のものであったから特に横堀とは呼ばない。曲輪の機能分化を行うために使用された堀が横堀である。
- ㉒ 村田修三氏の御教示による。

二 織豊系城郭の検討

この分野の研究は乏しいが、注目されるのは村田修三氏の論考である。村田氏は織豊系城郭を分析して、その特徴が嘴状に突出した虎口曲輪と、先端のくい違い虎口にあるとした。そしてこの障壁が一步前進して敵に近づく形態から、攻撃的性格を持つものと評価した。織豊系城郭の虎口構造と意味するところを初めて説いた研究である。

しかし縄張図を直接、分析したため、虎口分類は突出型、枡形型の二型式に留まり、両型式のつながりや発達を系統的に説明するに至らなかった。そこで先学に学びつつ、新しい視点から検討を行ないたいと思う。

1 分類の視点

虎口の型式分類に縄張の機能分化の評価を合わせて分類を進める。考察の基礎資料には発掘による遺構図と踏査による縄張図を使用する。ただし城郭は最大限自然地形を利用して築かれたので、縄張発達の法則性を導き出すには適切なモデル化が不可欠である。そこで基礎資料の模式化を二段階にわたって行う。まず、第一段階の模式化は問題になる虎口を縄張から抽出し、「折れ」と「空

間」に分解して考える。折れでは虎口部分の塁線を屈曲させ、城への進入ルートを直角に何回曲げるかを検討する。空間では虎口と密接に結びついて存在し、個々の虎口空間として機能する曲輪の有無を検討する。

第二段階の模式化ではこの虎口がそれ以外の城郭構成要素とどう噛み合って縄張全体を発達させたかを焦点に、虎口プランと堀・石垣の発達度を合わせて図化し、検討する。堀・石垣の分類では発達を三段階に分けて考える。第一段階は単純な堀切のみ、第二段階は堀切と部分石垣の使用、第三段階は横堀もしくは総石垣の使用とする。

2 事例の分類

先述の視点より織豊系城郭を5類型に分類する(表1)。

第1類型 松平城タイプ

城道○折・○空間の平入り虎口を持つ城郭である(図4)。代表例として松平城が挙げられる。松平城は松平郷松平氏の詰城であった。主郭大手虎口は土塁等を持たず、城道は直進して主郭に入る。しかも虎口まわりに独自の空間を認められない(図5)。

このように単純な虎口構造を持つものを第1類型とする。織田氏領国ではこの時期の遺構が確認できないが、同類型の城郭が多く

表1 検討を行った城郭一覧

	城 名	所 在 地	虎 口 型 式							備 考	
			1	2	3	4A	4B	5A	5B		
1	松 平 城	愛知県豊田市松平町	●								松平郷松平氏の詰城
2	品 野 城	愛知県瀬戸市上品野町		●							永禄3年落城
3	岐 卓 城	岐阜県岐阜市大宮町			●						永禄10年築城
4	宇 佐 山 城	滋賀県大津市錦織町			●						元亀1年築城
5	多 喜 山 城	滋賀県栗東郡栗東町			●						元亀2年～天正2年築城か
6	二 俣 城	静岡県天竜市二俣町			●						天正3年の武田氏退城後、徳川氏家臣大久保忠世が入城、改修
7	金 山 城	岐阜県可児郡兼山町			●						天正4～5年築城か
8	大 給 城	愛知県豊田市大給町			●						大給・松平氏の本城、遺構完存
9	長 光 寺 城	滋賀県近江八幡市長光寺町									天正4年破城
10	安 土 城	滋賀県蒲生郡安土町					●				天正4年築城
11	周 山 城	京都府北桑田郡京北町					●				天正7年～8年築城
12	黒 井 城	兵庫県氷上郡春日					●				天正7年～13年築城
13	七 尾 城	石川県七尾市古府					●				天正9年前田氏による改修
14	鳥 羽 山 城	静岡県天竜市二俣町					●				天正4年～18年築城
15	蛇 山 岩 尾 城	兵庫県氷上郡山南町					▲				天正7年～文禄4年築城
16	秋 山 城	奈良県宇陀郡大字陀町					●		●		天正13年～文禄1年改修
17	丸 山 城	三重県上野市下神戸						●			天正6年築城
18	大 森 城	岐阜県可児市大森						●			天正10年落城
19	鳥 越 城	石川県石川郡鳥越村						●			天正8年～慶長5年改修
20	松 尾 山 城	岐阜県不破郡関ヶ原町						●			天正7年以降改修
21	土 山 城	滋賀県甲賀郡土山町						●			滝川一益の手が入るか
22	山 崎 城	京都府乙訓郡大山崎町							●		天正10年築城
23	堂 木 山 城	滋賀県伊香郡余吾町							●		天正11年賤ヶ岳合戦で築城

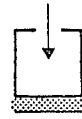


図4 第1類型模式図

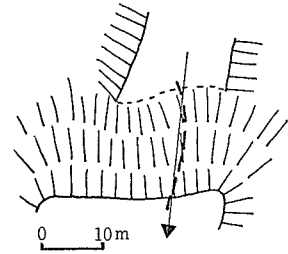


図5 松平城(0折・0空間)

存在したと考えられる。^③第2類型の出現時期から見てその下限は天文一〇年代までに比定される。

第2類型 品野城タイプ

城道一折・〇空間の虎口を持つ城郭である(図6)。代表例と

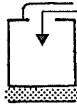


図6 第2類型模式図

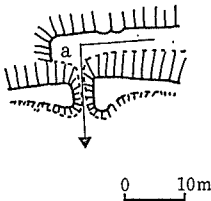


図7 品野城(1折・0空間)

して品野城が挙げられる。品野城は尾張、三河の境の城として永禄元〜三年(一五五八―一六〇)に争奪があったとされる。^④この城の主郭大手虎口は、テラス状に伸びた虎口受けの小曲輪を前面につつ(図7)。そのため外から入るには、虎口受け(a)で一度城道が折れることになる。強力な横矢掛けを狙ったものである。虎口両脇は土塁で固めるが、虎口独自の空間は認められない。使用される堀は第1類型同様、堀切のみである。このような構造を持つものを第2類型とする。

第3類型 宇佐山城タイプ

城道二折・〇空間の虎口を持つ城郭である(図8)。代表例として宇佐山が挙げられる。^⑤この城は元亀元年(一五七〇)に織田氏家臣、森可成によって築かれた。^⑥翌元亀二年には明智光秀が坂本城を築いて移り、廃城になった。

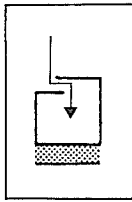


図8 第3類型模式図

主郭(1)南大手虎口(a)は、主郭塁線より全体的に虎口塁線が大きく張り出して違い違う。^⑦城道はそのため二度折曲して主郭(1)に入る。この大手虎口の発掘成果^⑧によると、一度折れた虎口内に櫓門が備えられていた(アミ部分)。敵兵の押し込み、見通しを避けて横矢を掛け、有利に出撃しようとするプラン

である。しかし虎口内は城道幅の広さしがなく、独自の空間として機能しない。また宇佐山城では虎口を含めた主郭群を石垣で囲めることが注目される。石垣はそれ程高くなく、段々にして畧線を維持する。石積技術が充分でないからである。そのため堀切を併用している。未熟だが、織豊系城郭の総石垣化への動きと評価

されよう。

一九八四年から発掘調査が進められている岐阜城千畳敷虎口は、宇佐山城主郭南大手虎口と類似のプランを持つ。公園化による破壊を受けているが、二度折曲して曲輪内に至ること、虎口内には城道幅の広さしがなく相対的に空間として機能しないこと、

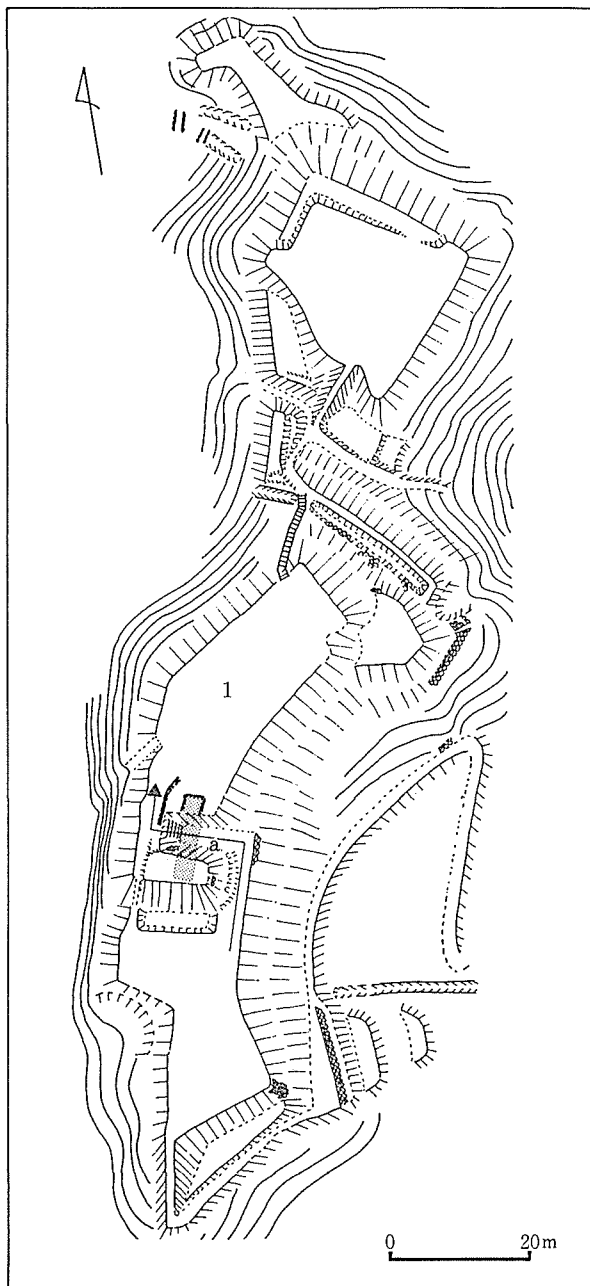


図9 宇佐山城

と評価できる。この類型の城郭は他に、^⑩城、金山城等がある。

第4類型

城道二折・一空間の虎口を持つ城郭である。安土城を画期とし

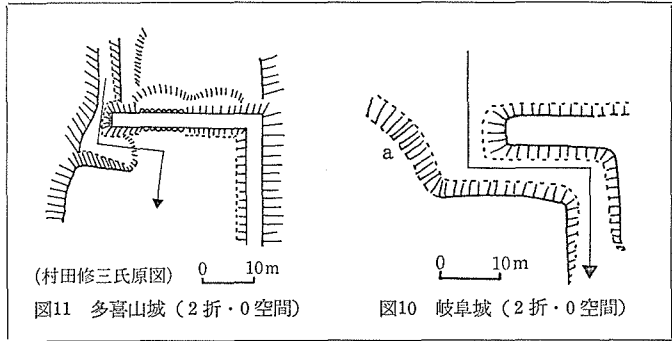


図11 多喜山城 (2折・0空間)

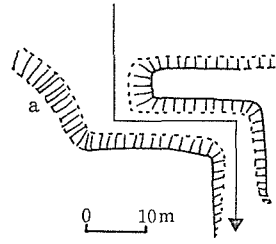


図10 岐阜城 (2折・0空間)

という基本性格は読みとれる(図10)。虎口脇の墨線^⑩(a)が自然地形に沿って開き、防禦性に乏しく見えるが、宇佐山城同様、城道が一度折曲した虎口内が本来門を備える所だったと考えられ、外側を嚴重に閉めきれないことに問題はない。以上の検討から岐阜城千疊敷虎口を第3類型の虎口と認めることができる。これより第3類型の虎口は永禄一〇年(一五六七)の織田信長による岐阜築城を画期として出現した虎口プランとして出現した虎口プラン、多喜山城(図11)、二侯

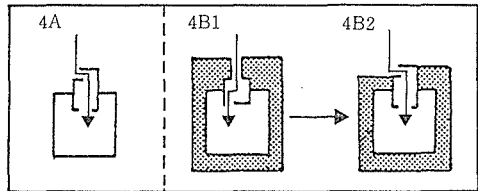


図12 第4類型模式図

て虎口空間の出現、城郭の機能分化が明確化する段階である。この類型の城郭は二つの系列に分けて考えることができる(図12)。一つは石垣・土塁による外折形に向うもの(第4類型A)、一つは横堀と噛み合わせて織豊系馬出に向うもの(第4類型B)である。第4類型Bは二段階に細分される(B1・B2)。これらは一見、異なった繩張思想に思われるが、折れと空間の分析から、同一の繩張思想が貫徹していることが理解される。

第4類型A 安土城タイプ

第3類型までの発達を直接に受け継ぎ、攻撃的な外折形を発展させた虎口である。代表例として安土城が挙げられる(図13)。

安土城は天正四〜九年(一五七六〜八一)にかけて築かれた信長の居城である。天正五年には天主閣の作事が始まっており、この頃までに山頂中心郭群の繩張は決定していたと考えられる。山頂郭群は総石垣で固め、山上部分に一切堀を使用しない。また山頂郭群から、直臣、上級家臣団の住む城下町を一体化して囲い込む

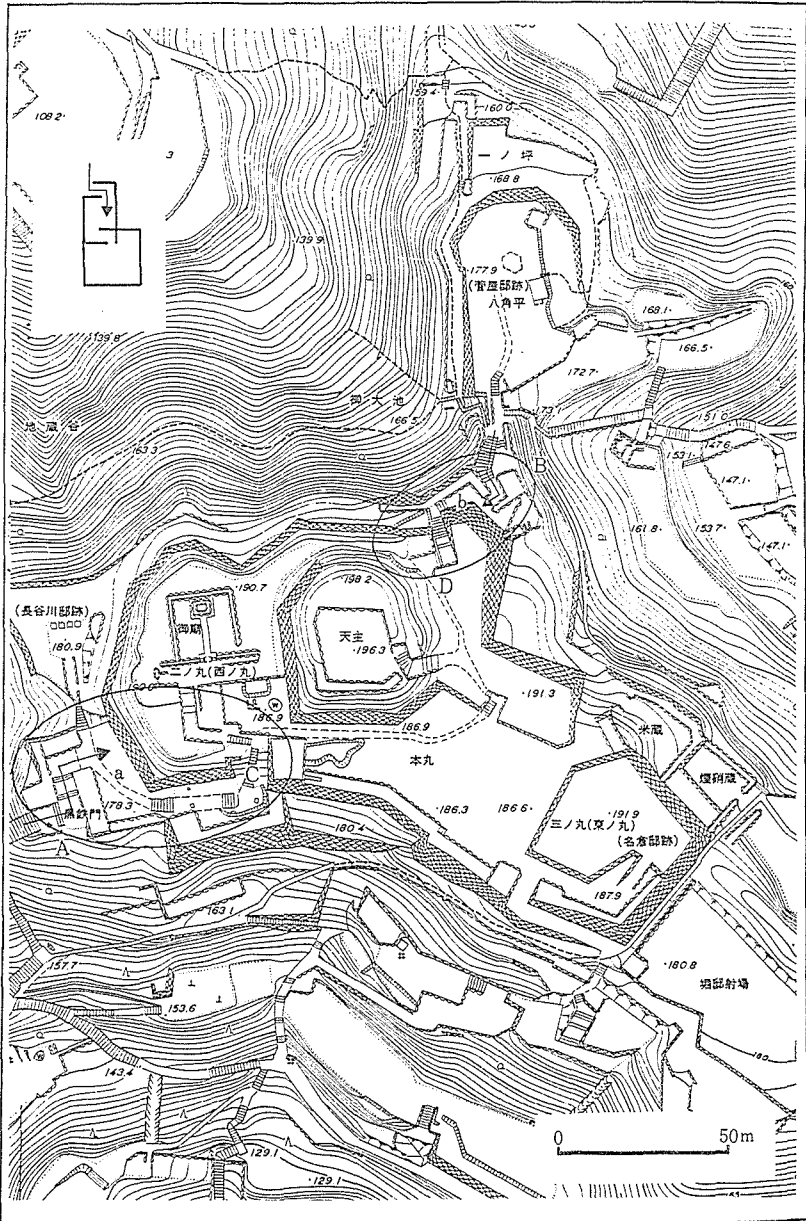


図13 安土城 (『滋賀県中世城郭分布調査4』) 所収図に加筆

総構を有していた。¹⁰

注目するのは、主郭群西の黒鉄門の虎口（A）と、主郭群北の虎口（B）である。このうち黒鉄門の虎口は山頂郭群全体の大手虎口と評価される重要な門である。折曲した虎口墨線がその後方の小曲輪（a）と一体化して突出する。そのため城道は二度折曲して後方の曲輪に至る。主郭群墨線全体が張り出すのではなく、虎口墨線のみが突出し、外枳形（図1参照）としての形態をほぼ整える。虎口後方の小曲輪（a）がセットになっていることが重要である。外枳形は強く出撃を意図した虎口であるから、これと一体化する小曲輪（a）はそれを一層貫徹させる機能を果たした空間と考えられる。つまりこの小曲輪は後方郭群（本丸・二ノ丸等）から大手方面への出撃機能を専門に受けもつ、独自の虎口曲輪と評価されるのである。そしてこの後方、二ノ丸（c）は防禦を固める内枳形になり、機能分化を示す。

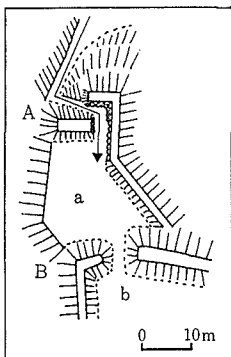


図14 七尾城（2折・1空間）

また、主郭群北虎口（B）も全く同じ型式で造られており、（b）が虎口曲輪、（D）が内枳形と評価される。これまで主郭等の曲

輪に内包されていた虎口機能が、虎口空間の創出によって、出撃機能が突出、虎口部分が張り出す外枳形を、防禦の虎口が後方へ退く内枳形を出現させたと理解される。今後、この機能分化の原理が中心になって繩張を形成していく。虎口空間の創出はきわめて重要な画期といえるのである。

七尾城は天正九年（一五八一）に前田利家の大改修を受けた。¹⁰

主郭西大手虎口（図14）は石垣で固められ、この時に成ったものと思われる。この虎口（A）も二度折曲して一体化した虎口曲輪（a）に入り、後方防禦の虎口（B）を経て主郭（b）に至る。二折れ、一空間の繩張による典型的な繩張といえよう。しかし、安土城と比して造りは簡略である。とはいえ、城郭の虎口として充分機能し得るものであったのだから、安土城の超越した嚴重さ、

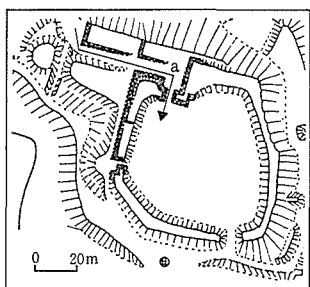


図15 鳥羽山城（2折・1空間）

時期的先行性を指摘できる。徳川氏の鳥羽山城では、第3類型虎口のくい違い幅を広くして、そこを虎口空間（a）として機能させる繩張が行われている（図15）。同一原理によりながら、徳川氏城郭の独自面が現われたと評価でき

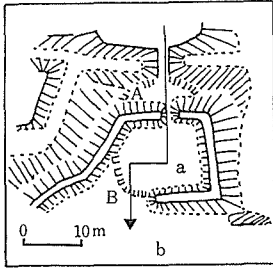


図16 丸山城 (2折・1空間)

順序が入れ替わる。虎口は一体化して張り出す虎口空間を持ち、出撃を意図したと考えられるが、正面の狭い土橋を渡らねばならず、全体として出撃機能を發揮し得たか疑問である。横堀を使用する縄張に虎口プランが対応

る。
虎口空間の出現によって明瞭化した内枿形はこれ以降継続的に使用され、第4類型以降を見る目やすになる。
第4類型B1 丸山城タイプ
横堀使用の城郭に第4類型Aの虎口をそのまま使用する城郭である。第4類型Aが総石垣の城郭であるのに対し、第4類型Bは土造りを主体とした横堀の城だといえる。
初見例の丸山城は天正六年(一五七八)に基本プランが確立したと考えられる城である^⑮。主郭群は直下の堀や堀状帯曲輪による横堀に囲い込まれる。横堀を土橋で渡る主郭北虎口は主郭から大きく張り出す大手虎口である(図16)。正面平入り虎口(A)を経て、虎口曲輪(a)に入り、二度折曲して後方の虎口(B)を通過して、主郭(b)に至る。土橋と組み合わせため、虎口の折曲

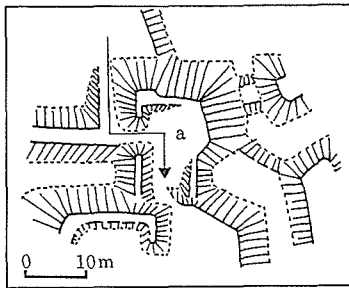


図17 大森城 (2折・1空間)

い土橋を避け、虎口曲輪がそのまま横堀を越えて突出した形態と考えられる。これによってB1段階の問題の克服を図ったと評価できる。
鳥越城は天正八年(一五八〇)以降織田勢に改修された城である^⑯。発掘成果によると、主郭大手虎口は虎口曲輪(a)

していないのである。これ以降、横堀の防禦性を活かしながら、いかに出撃有利な虎口にしていくかが、第4類型Bの発展課題になっていく。
第4類型B2 大森城タイプ
城道二折れの虎口が虎口曲輪ごと横堀を越えて対岸に開口する城郭である。
大森城は天正一〇年(一五八二)に反乱を起こした奥村氏の居城で、同年森長一(長可)の兵によって落城したとされる^⑰。現在見られる遺構は、これ以前に大改修を受けて成ったものと考えられる。中心曲輪群は横堀で囲い込まれ、主郭大手虎口と虎口曲輪(a)が突出する(図17)。横堀を越えて優勢に出撃するため、狭

が横堀を越えて対岸に接し、一体化した外柵形虎口を開く(図18)。元来あった堀を埋め、三方を石垣で囲めて虎口空間と外柵形を造っているのである。これは虎口プランを根本から変える大改修であり、大幅な築城主体の変化なくしては考えられない。それ故、織田勢入城以前の一向一揆勢によって造られた可能性はきわめて低い。これらの諸点より、鳥越城は織豊系城郭の第4類型B2段階の城郭と評価できる。

松尾山城は天正七年(一五七九)に織田氏家臣、不破光治が城主になったとされる。慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦で小早川秀秋の陣として手が加わった主郭を除き、城郭の基本プランはこの時に成ったものと思われる^②。主郭群南大手虎口は虎口曲輪

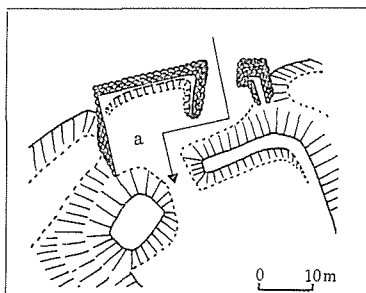


図18 鳥越城(2折・1空間)

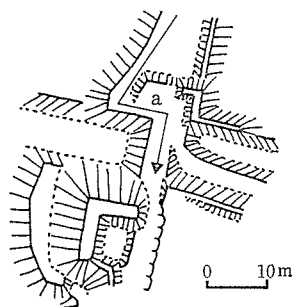


図19 松尾山城(2折・1空間)

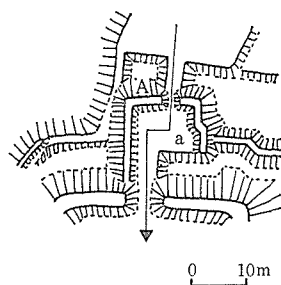


図20 土山城(2折・1空間)

(a) が大きく張り出し横堀を越える形態である(図19)。虎口曲輪の東脇に、二度折曲する虎口を開く。この虎口曲輪の後方は両側から堀に挟まれ、土橋状に狭くなる。虎口空間が堀対岸に分離して成立する馬出を強く指向したものと考えられる。しかし、虎口曲輪が突出して横堀を越える織豊系城郭の虎口発達系列に規制され、一度に馬出化することができていない。過渡的プランを示すものといえよう。これらのことより、第4類型B2段階の城郭と評価される。

土山城^②では、突出した虎口曲輪(a)の後方分離が一層進展する(図20)。前方にも堀を巡し、馬出化の動きはより明瞭になる。しかし、出撃の虎口(A)は虎口曲輪の正面に開き、B1段階虎

口に等しく進展が認められない。新しい要素と古い要素が混在しているのである。虎口の発達が様々な試行を重ねて進化した様子をおうかがうことができる。

このように第4類型Bは、安土城で出現した虎口空間を持つ虎口型式を、横堀と組み合わせて使用した城郭である。そして虎口曲輪が横堀を越えないものを第1段階に、虎口曲輪は横堀を越えて突出するが、虎口曲輪と後方の曲輪の分離が不完全なものを第2段階に細分して考えることができた。全体として、虎口曲輪が馬出化する過渡期と位置づけることができる。

第5類型

総石垣、横堀による縄張が貫徹し、これによる防禦ラインが多重化する。そして虎口曲輪の一般化が進展し、虎口空間を重ねて城郭全体を形成する、虎口機能の再編成によって、いわゆる近世城郭に到達する段階である。

第1類型から第4類型までの城郭の発達は、虎口機能を中心とした機能分化をいかに行うかという方向で進展した。それが攻撃重視の特殊な虎口空間機能を専有する虎口曲輪を生み出した。しかし機能を専有する曲輪であるが故に、そこを一旦突破されれば、その城郭は縄張上反撃する場を失う。

そこで第5類型の城郭では、城郭を形成する郭群の曲輪一つ一

つが虎口空間として機能することが考えられた。別言すれば、虎口曲輪の一般曲輪化である。これにより設定した特殊な場だけでなく、全ての曲輪で防禦と反撃を行う城郭に成り得たのである。

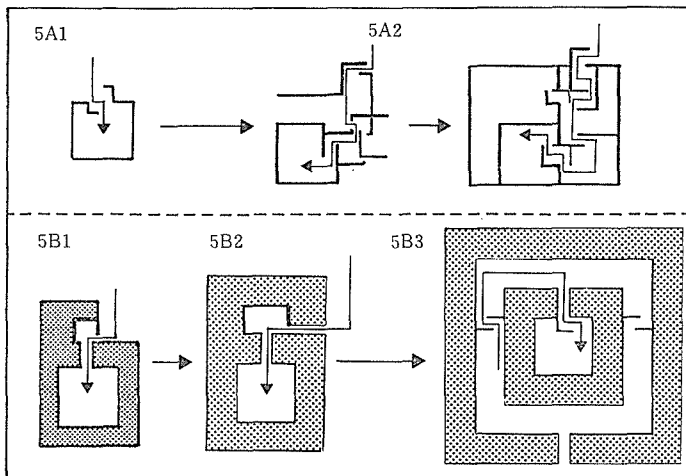


図21 第5類型模式図

このことが表面的には防禦ラインの多重化になり、内・外柵形の発達になった。第5類型では虎口空間は一般化して目立たず、柵だけが際立つことになる。

外柵形を通じて虎口空間の一般化を行うもの(第5類型A)と、馬出化を通じて虎口空間の一般化を行うもの(第5類型B)の二つの発展系列に分けられる(図21)。これらはいずれも二折・一空間から多折・多空間の城郭に進む。

第5類型A1 豊臣大坂城タイプ

防禦ラインの設定と外柵形を完成するが、城郭全体が虎口空間化するに至らない段階のものである。

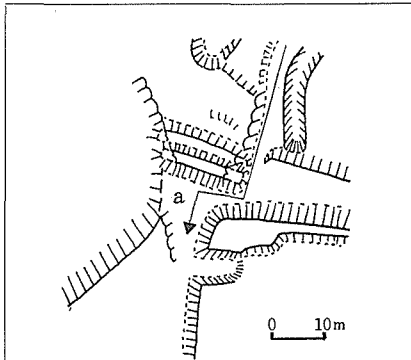
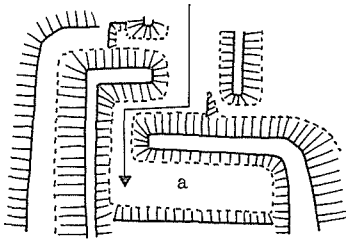
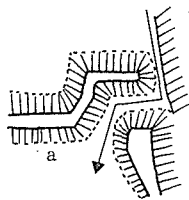


図22 山崎城(2折・1空間)



(中井均氏原図)

図23 堂木山城(2折・1空間)



(中井均氏原図)

図24 神明山城(2折・1空間)

山崎城^②は天正一〇年に秀吉によって築かれた。畿内政治の中心として重要な位置を占めたが、天正一一年に秀吉は大坂城に移り、翌十二年に廃城になった。現在見られる遺構は天正一〇年を中心としたものと考えられる。主郭群東端の虎口(図22)は土塁が外柵形状に突出する。後方の曲輪(a)を虎口空間として機能させるプランである。主郭周辺は総石垣で固め、それに至る諸郭には横堀^③を使用している。

ついで、賤ヶ岳合戦の陣城が注目される。天正一一年(一五八三)のこの合戦では柴田方、羽柴方共に多数の陣城やそれをつなぐ阻塞が築かれた。^④

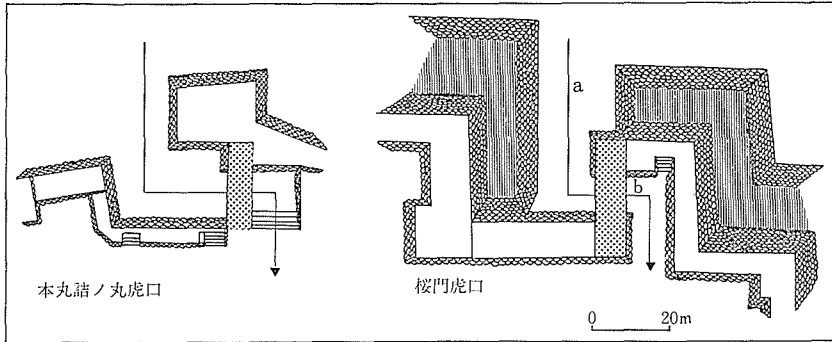


図25 豊臣氏大坂城(2折・1空間)

堂木山城は主郭から北東へ地続きに出る虎口が造られる(図23)。主郭内の一段低い部分(a)が虎口空間で、外枳形だけが突出する。城郭全体を横堀が囲い込んでいる。

神明山城では虎口空間として機能する後方の曲輪(a)から、きわめて明瞭に外枳形だけが突出する(図24)。そして主要郭群は横堀が巡っている。

いずれも防禦ラインを敵重に設定することによって、虎口空間機能を外枳形の後方曲輪で処理したものと理解

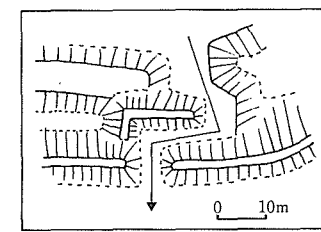


図26 和田山城(2折・1空間)

(a)を虎口幅(b)の倍程もとることによって、出撃時の不利を克服している。横堀で固く守りながら、虎口前だけは地続きの如くしているのである。第5類型虎口で完成した繩張である。同様のことが和田山城外枳形(図26)からも読みとれる。

以上のように外枳形後方曲輪の虎口空間化、防禦ラインの多重化、横堀と噛み合わせたA型出撃虎口前の土橋の拡幅が進展した段階を第5類型A1とすることができ。

第5類型A2 高取城タイプ

二折・一空間の関係が重層的に展開して城郭が造られる段階である。全ての曲輪が虎口空間として機能し得る繩張になる。文禄・慶長の役(一五九二―九八年)関連の城郭がその初見例である。倭城は朝鮮半島に豊臣大名が築いた城郭群の総称である。こ

される。

この類型の典型例は、豊臣氏大坂城である。本丸詰ノ丸南大手虎口では詰ノ丸から外枳形だけが張り出す。また桜門虎口では、張り出した外枳形と土橋を噛み合わせる(図25)。横矢が充分に掛り防禦性も強い。桜門虎口では土橋幅

図 27 倭城 (多折・多空間)

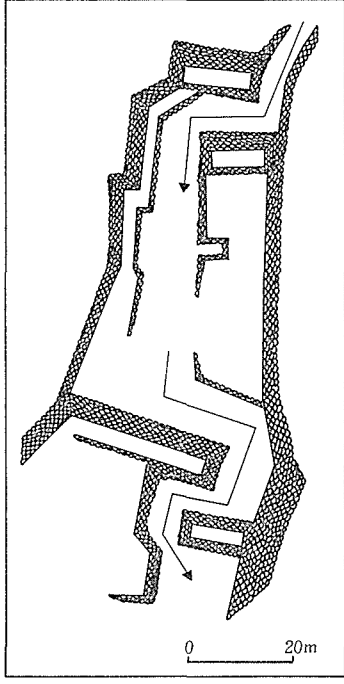
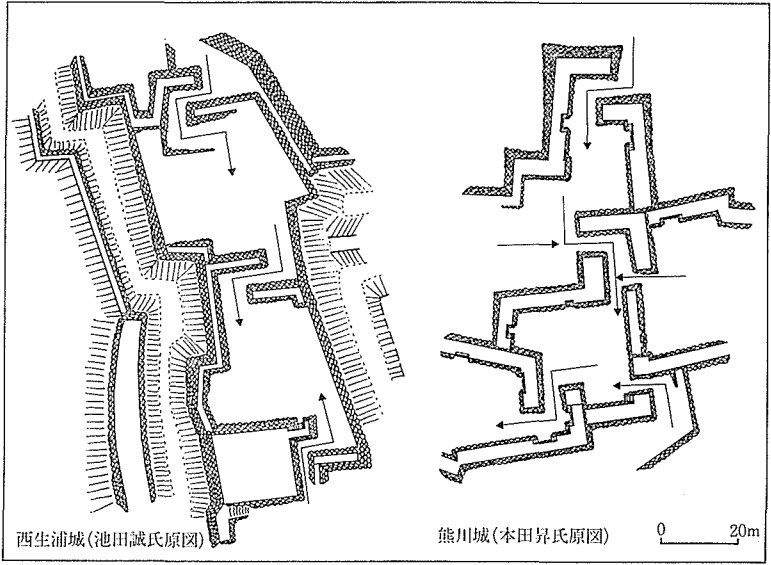


図 28 高取城 (多折・多空間)

れらは山頂に総石垣の郭群を築き、さらに横堀で囲い込む。きわめて嚴重な繩張を持つのである。いずれも臨時の陣城ではない、居城に等しい構造といえる。^{②③}

熊川城では外枒形と虎口空間として機能する曲輪が複雑に重ねられる。西生浦城では外枒形・内枒形・くい違い虎口を並び築く^④。各虎口後方の曲輪が虎口空間として機能する虎口曲輪として築かれ、それが連続することによって城郭が構成されているのである。これがいわゆる近世城郭の繩張の基本である。この原理で築かれた国内の城郭の代表には高取城、熊本城が挙げられる。

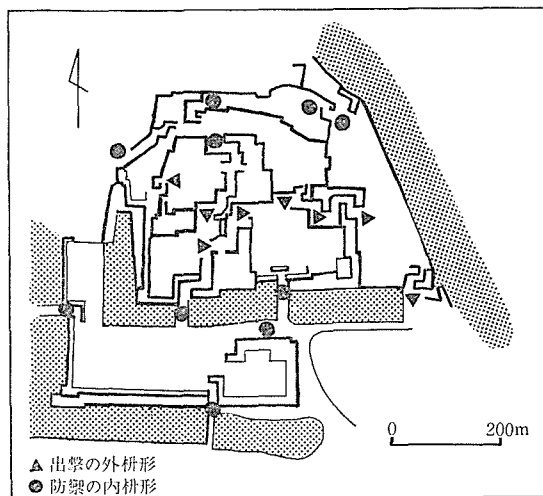


図29 熊本城（多折・多折・多空間）

高取城では主郭から大手口に向って九重に外枳形・くい違い虎口・虎口空間を連ねる（図28）。倭城の雑然さはなく、全曲輪の前後関係や攻守の関係がみごとに整う。

熊本城では内枳形で戦時には閉め切る虎口と、外枳形と虎口空間を重ねて攻め出す虎口とを明瞭に使い分ける。攻め出す虎口は高取城同様、出撃ルートとなって連なる。城の攻守が整然と計画されているのである（図29）。

このように第5類型A2の城郭は、外枳形の使用と虎口曲輪の一般曲輪化を貫徹した城郭である。これによって曲輪の続く限り防禦と反撃をくり返す完成された城郭、いわゆる近世城郭に到達したのである。

第5類型B1 玄蕃尾城タイプ

馬出外側の虎口は虎口曲輪が突出して横堀を越えた織豊系城郭の発達系列に規制され地続きだが、馬出後方の曲輪とは分離が確立する段階である。

玄蕃尾城は天正十一年の賤ヶ岳合戦以前に築かれた柴田勝家の城郭である。賤ヶ岳城塞群中傑出した規模を持ち、合戦範圍の北端に位置する。

主郭南大手虎口は、突出する虎口曲輪の後方に堀切が入り主郭から独立する（図30のa）。虎口曲輪の後方分離が完成したと評價される。形態はほぼ馬出に近いが、馬出から外へ出る虎口前面（A）には堀が巡らず地続きのままになる。ところが主郭北虎口（b）では逆に主郭との分離が弱く、一体的な繩張りになり、馬出から外へ出る虎口前面（B）に堀を巡らして土橋でつなぐ。

この違いは、南虎口が合戦場に向い、攻め出すことを重視するのに対し、北虎口は後背地に向い、防禦の比重を高める必要があったからだと考えられる。つまり二つの虎口は期待される機能を

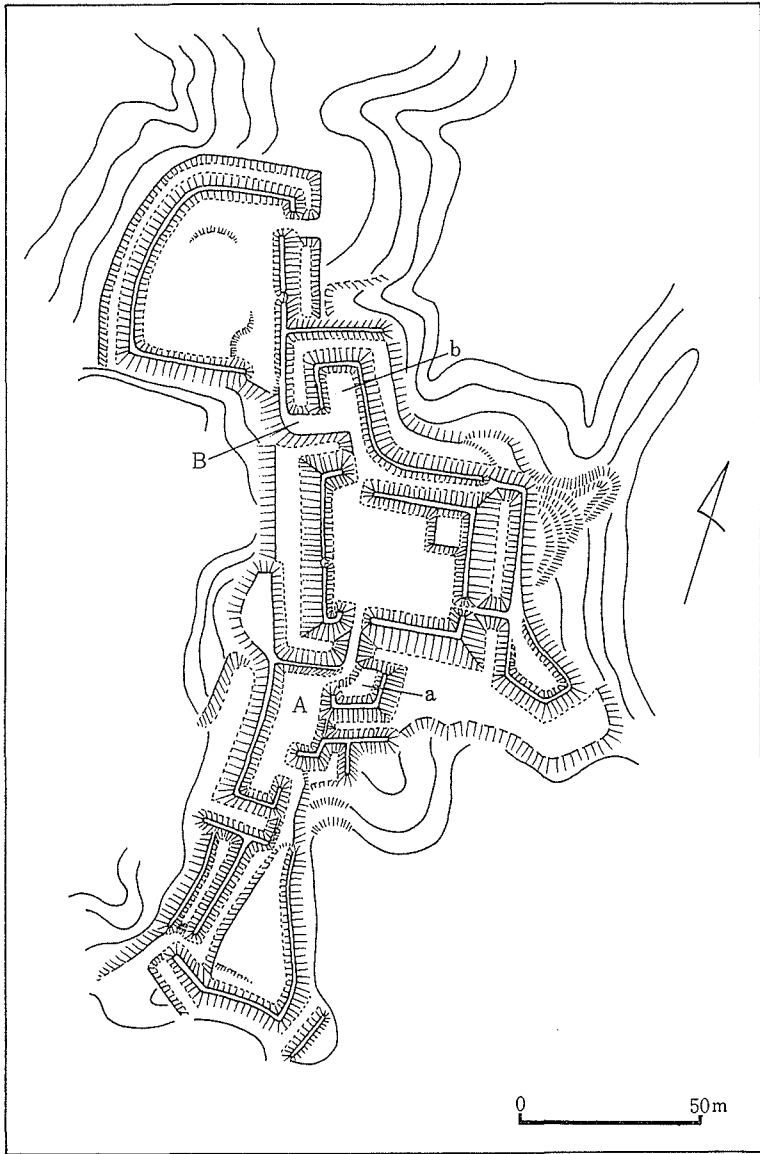


图30 玄蕃尾城（2折・1空间）

果たすため、それぞれの形態に普請されたことが確認できるのである。

この合戦で羽柴方の堀秀政が築いた東野山城の大手虎口(図31)でも馬出から外へ出る部分の堀はなく、玄蕃尾城主郭南虎口と同一型式を示す。

徳川氏の岩津城^②は、虎口曲輪が二方向に虎口を開く(図32)。西へ出る虎口(A)は土橋を渡る形で完成した馬出に近づぐが、もう一方の虎口(B)は地続きのままである。やはり、虎口前面の堀を欠いた馬出と評価される。

天正一一年〜一二年に佐々成政が前田利家によって改修された松根城は中心郭群南端に馬出状の虎口曲輪を持つ(図33)。西下

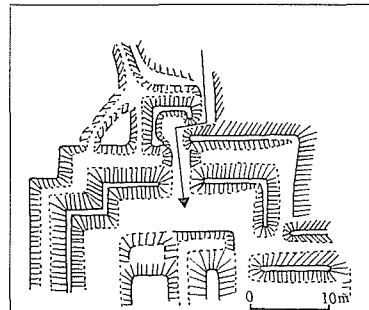


図31 東野山城 (2折・1空間)

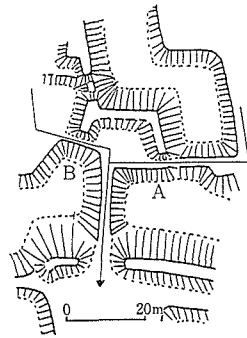


図32 岩津城 (2折・1空間)

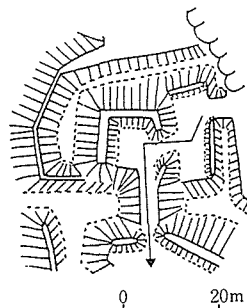


図33 松根城 (2折・1空間)

の小曲輪を含んで横堀が囲い込むが、馬出から外へ出る虎口前には堀がなく地続きになっている。

このように第5類型B1は、外側虎口前面に堀を巡らさない一部地続きの馬出を持つ城郭とすることができる。

第5類型B2 岩崎城タイプ

馬出から外へ出る虎口部分にも堀が巡り、四方に堀を備えた形態になる段階である。

岩崎城は丹羽氏の居城で、天正一二年(一五八四)の小牧・長久手の合戦によって落城した。その後も城は使用されたが、一八九五年に行われた発掘成果より、現在見られる遺構は落城直前に改修されて成った可能性が大きくなった。^③

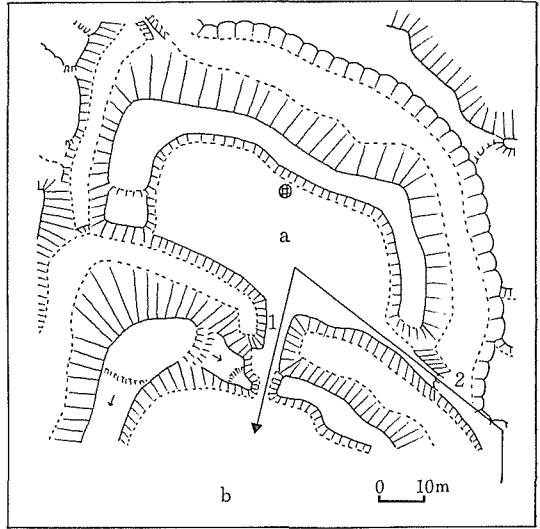


図34 岩崎城（2折・1空間）

主郭北側、通称二ノ丸が馬出と評価される（図34）。四方には横堀続きの堀が巡る。後方主郭（b）との間の堀を土橋（1）で渡り、虎口曲輪（馬出・a）に入る。そして再び堀を土橋（2）で渡って外の曲輪に進む繩張である。出撃にも防禦にも強いパランスのとれた虎口と評価される。同形態を示す馬出は末森城、杏掛城、菩提山城等が知られる。また関東に移封された徳川氏家臣の諸城も多く第5類型B2の虎口を採用する。豊臣氏系の大名が

多く第5類型Aを採用、発達させたのと対照的である。

一見すると第5類型B2虎口は武田氏・後北条氏の使用した馬出と類似する。しかし織豊系の馬出は必ず三方に土塁を備える点が異なる。これは織豊系の馬出が、くい違い虎口と虎口空間の組み合わせから発達し、その先端まで城兵が常に進出して守り、出撃する曲輪だったからである。中立空間的に使用したと考えられる、武田氏・後北条氏の馬出とは虎口として差があったのである。だから近世城郭の馬出も織豊系城郭の虎口発達系列の中に生まれ、完成したものとすることができる。

このように第5類型B2は、四方に堀が巡る整った形態の馬出を持つ城郭である。

第5類型B3 名古屋城タイプ

徳川氏の手で織豊系馬出の再編成が行われる段階の城郭である。馬出という本来虎口機能を専有する曲輪を備えながら、専有性を否定して虎口空間の一般化が行われるのである。

名古屋城は慶長一五年（一六一〇）に築かれた。本丸南馬出は三方を土塁で固める典型的な織豊系馬出である（図35）。しかし馬出から外へ出る虎口部分がくい違い虎口になる点は従来と大きく異なる。これより、この虎口部分では城道は二折れして、虎口空間（a）に入ることになる。さらに本丸に至るには、折形によ

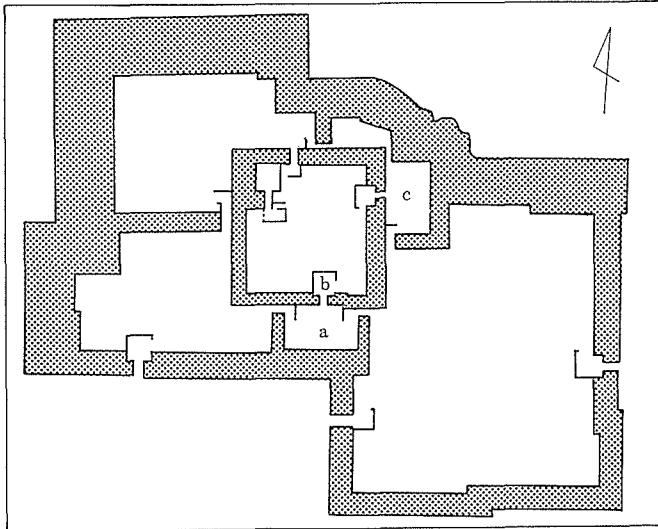


図35 名古屋城概念図（多折・多空間）

る虎口空間（b）を経て、二折れして入る。つまり、くい違い虎口と虎口空間を連ねたプランになっているのである。これは第5類型A2と同じ構成であり、馬出という異なる形態をとりながら等しい原理が働いているとできるのである。

また本丸を一巡する曲輪間の虎口が、全て馬出虎口と同じ形で繩張されていることは注目し値する。各曲輪が後方の曲輪に対し、くい違い虎口・虎口空間として連続して機能するように計画されているのである。馬出形態を連続させることによって、城郭全体の虎口曲輪化を完成しているのである。だから名古屋城では、馬出として典型的な形を示すのは本丸南馬出（a）と東馬出（c）だけであるが、実質的な出撃、防禦機能は全ての曲輪が等しく果たし、もはや馬出はその機能を専有するものではないのである。

この動きを一層強めて築かれたのが、徳川氏大坂城、二条城を代表とする城郭である。馬出が出撃機能を専有せず、城郭全体が虎口空間として働く城では、馬出を他と特に区分して堀を巡す必要はなく、馬出（相当部分）も連続する虎口曲輪の一つになる。そのため堀は墨線外側に横堀として収斂される。

徳川氏大坂城（図36）では本丸桜門を出た部分（a）と、山里丸を北に出た部分（b）が馬出相当の場所である。しかしいずれも、馬出たらしめる堀はなく、くい違い虎口と仕切りの石塁のみになる。これだけを見れば退化の動きと誤りかねないが、城郭全体がくい違い虎口でいくつにも仕切られ、連続して虎口空間として機能する城郭に進化しているのである。

この郭内に堀を持たない、くい違い虎口、虎口空間の連続ベタ

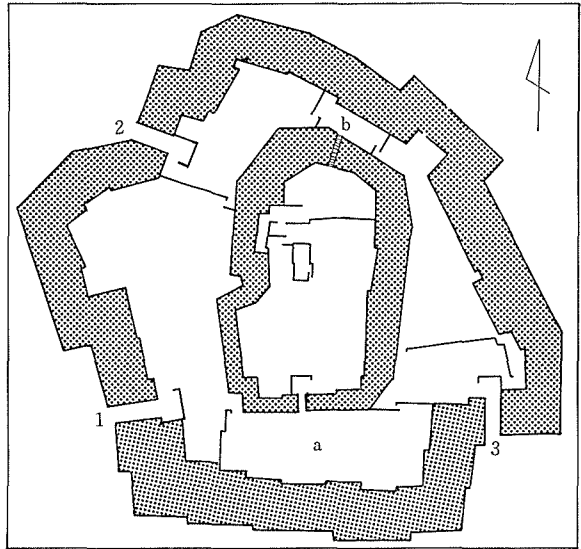


図36 徳川氏大坂城概念図（多折・多空間）

1ンは先に検討した第5類型A2と全く同一である。安土城以降、突出する外枳形（A類）と、横堀に対応する馬出（B類）に分かれて発達してきた織豊系城郭は、徳川氏の天下普請の一連の城郭プランの中で統一され、完成した近世城郭を出現させたのである。そしてこれは虎口機能を専有する、いわゆる馬出の終焉をもたらしした。

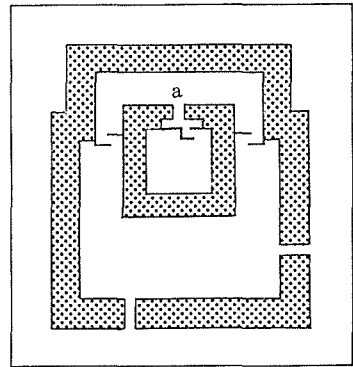


図37 二条城概念図（多折・多空間）

化すると同時に、枳形部分の虎口空間化も確立するのである。

二重の虎口空間が組み合わさって城郭が構成されたといえる。これらの城郭では横堀から外に出る所に虎口空間として機能する曲輪はないが、それを補うために土橋はきわめて幅広になる（例えば図36の1・2・3）。

寛永元年～二年（一六二四～二五）にかけて大改修された二条城（図37）では、本丸西側馬出相当部分（a）と、二ノ丸の仕切り虎口が一体化して、近世城郭の最も理論化された明快な繩張を見せる。

① 村田「高安山城の遺構について」（『城』一一四、関西城郭研究会、一九八四年）、同「織豊期の繩張りの一特徴について」（『第一回全国

また名古屋城、大坂城では虎口空間化した曲輪から外へ出る虎口（例えば図35のb）が内部にもう一つの虎口空間を持った枳形になっていることが注目される。

城郭全体が虎口空間

- 城郭研究者セミナー発表資料、中世城郭研究会、一九八四年)。
- ② 現在、松平城を囲い込む横堀が見られるが、これは天正期と思われる改修の結果である。本来は損切だけだったと考えられる。武田氏の三河進出との関連が推定される。
- ③ 城郭がこの時期以降の改修を受けることが多いため、古い段階の縄張が確認できない。また尾張地域では遺構の破壊も進んでいる。早急に悉皆調査を行う必要がある。
- ④ 『松平記』、『尾張志』等によれば、松平勢の守る品野城を織田勢が攻め、一旦は撃退したが落城した。廃城は桶狭間合戦(一五六〇)が終わり、織田氏と松平氏が同盟を結んだ後であろう。
- ⑤ 拙稿「宇佐山城」(『近江の城』一八、滋賀総合研究所、一九八六年)で若干の見直しは述べた。
- ⑥ 『多聞院日記』永禄一三(元亀元)年三月二十日の条に、森可成が城を築き、今道越、逢坂越の街道を封鎖、新道を開いていたことが見える。
- ⑦ 朝倉氏等もくい違い虎口を使用するが、虎口を石垣で固め、虎口空間と一体化していくのは織豊系の城郭である。
- ⑧ 滋賀県教育委員会『大津市宇佐山城跡調査概要』(一九七二年)。
- ⑨ 北垣聰一郎「近世城郭における石垣様式編年の一考察」(『史泉』五〇、一九七五年)による。
- ⑩ 現地で岐阜市教育委員会高木洋氏の御教示を得た他、同「岐阜公園千畳敷——織田信長居館伝承地——における発掘調査」(『日本歴史』四六〇、一九八六年)による。現在、調査が進行中なので十分な検討は報告書の刊行を待たたい。
- ⑪ 元亀元年(一五七〇)に柴田勝家によって築かれた長光寺城(滋賀県近江八幡市)も当然第3類型虎口を持つはずであるが、現在見られない。これは『信長公記』巻九(天正四年)四月一日条に「観音寺山・長命寺山・長光寺山・伊場山、所々の大石を引き下し、千、二千、三千宛にて、安土山へ上せられ候」とあるように城を破却して石が持ち去られたからである。
- ⑫ 『安土日記』による。
- ⑬ 近年の筆者らの調査によって遺構を確認した。山稜上の石塁ラインと山麓の水濑ラインを一体化して、山腹と麓の屋敷地を囲い込む。織豊期の城下町と総構を検討する上できわめて重要であろう。拙稿「安土城総構の再検討」(『近江の城』二三、滋賀総合研究所、一九八七年)で概要を報告した。
- ⑭ 村田前掲①「高安山城の遺構について」による。
- ⑮ 『伊乱記』によれば天正六年に下山甲斐の手引きによって、滝川勝雅が北畠信雄の命を受けて、丸山城を築いた。しかし同年中に伊賀勢の攻撃を受け落城した。
- ⑯ 『新撰美濃誌』の記述による。また大森城に関する論考には、林春樹「大森城址」(『城』一〇〇、東海古城研究会、一九八一年)がある。
- ⑰ 東四柳史明「加賀一向一揆と白山籠鳥越城」(『鳥越城跡発掘調査概報』、鳥越村教育委員会、一九七九年)による。
- ⑱ 前掲⑦「鳥越城跡発掘調査概報」による。
- ⑲ 『美濃明細記』の記述による。松尾山城に関する論考には、井上佑城「松尾山城」(『城』九三、東海古城研究会、一九七九年)がある。
- ⑳ 主郭内枳形はきわめてよく整い、慶長の改修によるものと考えられる。
- ㉑ 土山鹿之介が築いた城とされ、文献上織田氏が入ったことは確認できないが、織豊系城郭でなければ考えられない縄張である。
- ㉒ 山崎城に関しては中井前掲はじめに⑦「山崎城の構造」が詳しい。しかし、その中で「秀吉流築城」とするものが、全て秀吉の創始によるものでなく、織田系城郭プランを受け継ぎ、発展させたものである。

ことに留意する必要がある。また陣城を、それが造られた状況の検討なしに、恒久的な城郭と比較することは適切でない(後述)。

⑳ 一部分は帯曲輪状になっている。

㉑ 長谷川銀蔵・博美氏の調査によって明らかになった。同「賤ヶ岳合戦の山城砦」(『民俗文化』二〇二・二〇三・二〇八・二一九・二二四・二二六・二二七・二二九・二三四・二三七・二三九・二四九・二五〇・二六一・二六五・二六八・二七〇〇七、一九八〇〜八六年、滋賀民俗学会)しかし陣城は居城と違い合戦の状況によって普請度が異なる。そのため一律に時代を代表する繩張とはできない。賤ヶ岳合戦の陣城は勢力伯仲の城塞戦下に造られており、当時最新の繩張と考えてよい。

㉒ 倭城の実態は不明な点が多かったが、倭城址研究会の調査により、ようやくその姿が明らかになりつつある。倭城址研究会『倭城』一、一九七九年、また、佐賀県教育委員会『文祿・慶長の役城跡図集』(特別史跡名護屋城跡並びに陣跡)、一九八五年)が刊行され、より多くの倭城を概観できるようになった。

㉓ そこに朝鮮半島領土化の強い意志を読みとることができるであろう。熊川城、西生城浦の挿図は、前掲㉒文献所収図を筆者が再トレースした。

㉔ 堀、土塁の普請量が他の陣城に比して格段に多いので、賤ヶ岳合戦の直前に築かれたのではなく、天正一〇年の清洲会議後、柴田領になった長浜と北ノ庄を結ぶために築かれたことも考えられる。

㉕ 文献から天正期の岩津城を明らかにすることはできないが、現在見られる遺構から、この時期に岩津城の繩張を根本から変える画期があったことを指摘できる。

㉖ 岩崎城の最終的な廃城は天正一四年(一五八六)の織田信雄検地に伴う知行替で、丹羽氏が北伊勢(朝明郡内)に移され、本領地岩崎の

支配を完全に否定された時と考えられる。加藤益幹「織田信雄の尾張・伊勢支配」(有光友学編『戦国期権力と地域社会』、吉川弘文館、一九八六年)

㉗ 本丸の発掘調査終了後、史跡整備として本丸に建設された資料館のため、遺構が破壊された。尾張地域の丘城では最も保存状態のよいものの一つで、蓬左文庫の絵図と比較検討も可能だっただけに、重要な城を失った。

㉘ 前川要氏の御教示による。

㉙ この部分の面積が大きいのは改修前の曲輪に影響されたためだと思われる。

㉚ 末森城では馬出を含め、後世の畑化のために土塁はほとんど残っていない。

三 織豊系城郭の変遷

前章で織豊系城郭の変化の概略を示した。そして虎口が繩張の発達を最もよく表し、堀・石垣がいくつかの虎口型式にわたり、ゆるやかに変化することを確認した。この中に画期と考える大きな変化は五つあった。これをもとに織豊系城郭を図38のように編年したい。以下では各期についてまとめることにする。

〔第I期〕 松平城を標式とする。天文一〇年代(一五五〇)までの間である。折れも虎口空間も持たない、第1類型虎口に堀切を備えた城郭である。土塁はあまり発達していない。

〔第II期〕 品野城を標式とする。天文一〇年代〜永祿一〇年



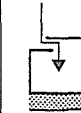
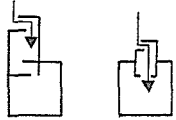

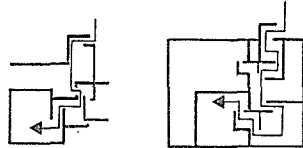
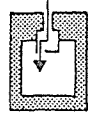
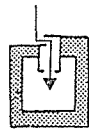
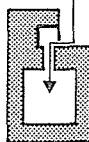
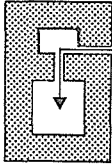
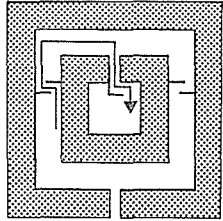
	I 期 天文10年代 (1550頃)	II 期 天文10年代(1550) 永禄10年(1567)	III 期 永禄10年(1567) 天正4年(1576)	IV 期 天正4年(1576) 天正10年(1582)	V 期 天正10年(1582)			
A	1 	2 	3 	4A 	5A1 	5A2(1592~) 		
B				4B1 	4B2 	5B1 	5B2(1584~) 	5B3(1609~) 

図38 織豊系城郭編年図

(一五五〇～六七)の間で、織田信長の岐阜築城以前である。城道が一折れする第2類型虎口に堀切を備えた城郭である。土塁は要所に使用される。この時期以降城郭が急激に発達する、全国的動向を表すものと評価される。

〔第Ⅲ期〕 宇佐山城を標式とする。永祿一〇年～天正四年(一五六七～七六)の間である。信長の岐阜築城を画期に出現する。城道が二折れする第3類型虎口に、堀切、土塁、石垣を備えた城郭である。各戦国大名の城郭プランに特徴が現われてくる中で、織田氏の城郭の特徴が明瞭に現われた時期とすることができ。

〔第Ⅳ期〕 安土城を標式とする。天正四年～一〇年(一五七六～八二)の間である。外柵形虎口を貫徹していく第4類型Aと、馬出虎口を貫徹していく第4類型Bに分化して展開する。Bグループは二段階に細分され、B1は丸山城を標式として、虎口曲輪が堀を越えない段階に、B2は大森城を標式として、虎口曲輪ごと堀を越える段階に位置づけられる。A・B共、城道が二折れして、虎口空間を持つ第4類型虎口の城郭である。

総石垣、堀切の使用、虎口曲輪の出現と飛躍的に繩張が発達し、機能分化が進化した時期である。

〔第Ⅴ期〕 A・B両グループに分化して展開するが、Aグループの第2段階、Bグループの第3段階で両者は一体化し、完成さ

れた近世城郭を実現する。

第5類型Aは、虎口空間の一般化が始まる、豊臣氏大坂城を標式とするA1、城郭全体の虎口空間化が確立した、高取城を標式とするA2に細分して考えられる。

第5類型Bは、虎口曲輪の後方分離が完成し、玄蕃尾城を標式とするB1、馬出としての形態が確立した、岩崎城を標式とするB2、城郭全体の虎口空間化を完成させた、名古屋城を標式とするB3に細分して考えられる。各期間には、A1を天正一〇年～文祿元年(一五八二～九二)に、A2を文祿元年以降(一五九二～)に比定できる。また、B1は天正一〇年～天正二年(一五八二～八四)に、B2は天正一二年～慶長一四年(一五八四～一六〇九)に、B3は慶長一四年以降(一六〇九～)に比定される。このB3段階は馬出の終焉期である。

これらを通じ、織田氏、豊臣氏、徳川氏の城郭が強い規範性を持ち、その政権化の諸域に一貫して強い影響力を有していたことが理解された。統一政権の領土拡大に伴う侵攻地に、在地の城の繩張とは遊離して拠点の城郭が築かれ、次いでその在地勢力が統一政権に参加した段階で、織豊系城郭を築くというプロセスが展開したのである。そしてこれは、その在地勢力の権力の飛躍を具体的に示したものと考えられるのである。文祿・慶長の役の直後

に、赤松氏の但馬竹田城等が構築されていたことは象徴的である。

さらに縄張からは、織田氏の城と豊臣氏の城が強い連続性を示すことが判明し、両者の一体性が指摘できた。そして第Ⅴ期以降二つの発展系列に分かれた織豊系城郭は、慶長期の徳川氏による一連の天下普請の中でプランを統合し、それが各大名の居城を、いわゆる近世城郭として規定していったのである。

戦国期から近世初頭の城郭の変遷を概観すれば、様々な発展方向を持っていた中世城郭が、織豊系城郭の縄張に統一されていく過程といえるのである。

- ① 織豊系城郭のくい違い虎口、外柵形はⅢ期、Ⅳ期までは初回左折れをするのが原則である。しかしⅤ期では、ほぼ初回右折れに変化する。横矢をより合理的に掛けるためだとされる。村田前掲二①「織豊期の縄張りの一特徴について」による。
- ② 篠山城の築城を最初のものと考ええる。

おわりに

織豊系城郭が権力や社会を反映して、不断に変化することの意

味を問い、いかなる特徴を持って発達していったのかを追求してきた。そして本稿ではこの成果として、織豊系城郭の編年案を提示した。しかし戦国期以前は検討が不十分になった。また、織豊系城郭と平行して発達していった、各地の戦国大名の城郭を段階的に比較することはできなかった。多様な視座から城郭を読み込むことが求められるのである。今後に期したい。

〔付記〕 本稿は一九八六年一月、奈良大学文学部に提出した卒業論文を全面的に改題、改稿したものである。終始温かい御指導を賜った、水野正好先生、村田修三先生、小島道裕先生、北垣聰一郎先生、中井均氏をはじめとする城郭談話会の諸兄に感謝申し上げます。

（名古屋市見附台考古資料館 学芸員）